特集

「大学院課程」

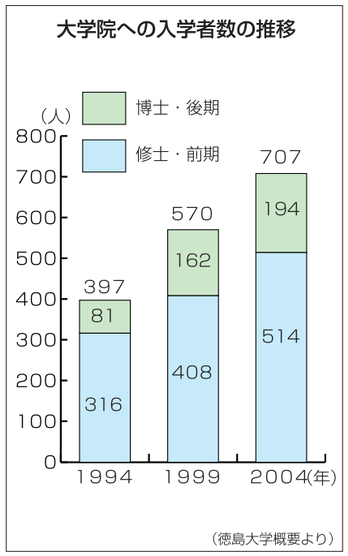
大学院入学者が増加する中、大学院の改革、変革が望まれ、高度化、多様化が進んでいます。
本学ではこのような時代にあって、どのように取り組んでいるのか、
また企業や社会では、大学院に対して何を求めているのか、
本学の考え方と、外部からのご意見、
それぞれの立場からお話しをいただきました。

理事（教育担当副学長）
川上 博 かわかみ ひろし

1

法人化に伴い各大学の掲げるビジョンがいままで以上に注目されています。そのビジョンをカタチにするための具体的施策を記した本学の「中期目標・中期計画」では、「学部・大学院6年教育の推進」が謳われていますが、なぜ本学にとって「学部・大学院6年教育の推進」が必要なのでしょうか。

理由は、大学院を取り巻く教育研究環境の変化です。図は、本学の大学院入学者数の推移を示しています。10年でほぼ1.8倍に増えています。同様な傾向は全国的にもみられ、大学院の重点化や専門職大学院など制度の新設あるいは弾力化によって、質量共に整備されてきました。本学でも今年の4月から蔵本地区の大学院が部局化され、先生方は大学院研究部の所属となり、学部や大学院の教育を行うシステムに改組されました。このように大学院の教育研究の高度化・多様化が進んでいます。その背景としては、これからの社会では、細分化された個々の領域における研究とそれらを統合・再編成した複合的な学問とのバランスのとれた発展が必要であり、学術研究の著しい進展や社会・経済の変化に対応できる幅の広い視野と複合的な判断力を備えた人材の養成が求められているからです。



（徳島大学概要より）

したがって、時代の要請に見合った教育課程や教育方法・形態への見直しが必要です。①学術研究の高度化 ②高度専門職業人の養成機能、社会人の再学習機能の強化 ③教育研究を通じた国際貢献などの観点から考えると、教育内容は年ごとにふくらみます。修士や博士前期の2年間の教育と学部4年間の教育を接続させ、一貫性のある特色教育を行いたいのです。

2

では、学部と比べて大学院ではどのような教育を行い、どのような人材の育成をめざすのでしょうか。

学部・大学院博士前期（修士）教育として、①学部教育では、教養科目と専門における基礎科目を基本とし、入口と出口に対する接続教育（高校教育、博士前期（修士）課程、専門職業教育）を付加すること、②博士前期（修士）課程では、専門における基礎・応用科目を基本とし、接続教育（学際科目、教養科目、専門職業科目等）を付加することと言った特長をもたせ、思考力、言い換えると課題探求能力をもち、基礎学力をしっかり身に付けた院生を育成し、将来の進路として高度専門職業人あるいは研究者のどちらを選択しても業績のあげられる修了生を送り出したいと考えています。

「社会が大学院課程に求めるもの」

日清オイリオグループ株式会社
理事 研究所副所長
青山 敏明 あおやま としあき

企業が追求するものの究極は利益ですが、企業の研究者としては何をすればその目的を達成できるかを常に考える必要があります。また、企業の研究で最も重要なのは新規性と進歩性、即ちオリジナリティーですが、インプット（研究開発費用）に対するアウトプット（利益）が見込めるかについても十分に検討した上で仕事に取り組まなければなりません。一般に大学の研究よりも、自由度が少なく時間や予算も限られた中で、研究開発を行わなければならないという制約はありますが、自分の研究開発したものが、直接、消費者に利用されるという意味では本来の研究開発の持つ醍醐味が味わえるとも言えます。自分が少しでも携わった商品が実際に消費者に使われ喜ばれることは研究開発者の最大の喜びでしょう。大学院課程では、院生に研究する喜びを少しでも感じられる授業や実習を行い、外部講師を招いた講演等を取り入れて頂きたいと思います。特に企業の研究者を招いた講演会については定期的に行うようにカリキュラムに組み入れて頂くことを要望します。大学院を修了した学生一人一人が仕事に夢を持って社会に出られるような、魅力のある大学院課程であってほしい。企業はその夢を実現させる場所でありたいと願っています。

四国化成工業株式会社
人事総務部長
真鍋 志朗 まなべ しろう

「コア・コンピタンス」という言葉をご存知でしょうか?卓越性の重視――つまり、得意な分野の技を徹底的に磨くということです。四国化成は今、この「コア・コンピタンス」を経営理念に掲げ、強みや優れた知識・技術を基軸に事業展開しています。競争の激しいグローバル社会を生き抜いていくためには、会社も人も、自分のコア技術、知識の深化を図り、知恵と腕で荒波を乗り越えていくしかありません。

私どもの強みとしては、水泳プールの殺菌などに使われる「塩素化シアヌル酸」、電子機器に搭載されるプリント配線板に使う防錆剤「タフエース」など世界ナンバーワンの地位を確立しているものが幾つかあります。また、備長炭を配合した塗り壁など、独自の技術を持っています。

皆さんはいかがですか?例え小さなことでも「これだけは人に負けない」「私がナンバーワン、オンリーワン」と胸を張って言えるものを持っていますか?あるいは、持とうと努力していますか?

確かに大学や大学院は高度な「専門知識」を身につける場です。しかし、それだけにとどまらず、実践し、発見する、そして知恵をつける、そんな場にしていただきたいと思います。また、豊かな情操を身につけ、常に感性を磨いておくことも肝要です。時には自然の中に身を置き、五感を鍛えることも忘れないでください。何事も経験、いろんなことに挑戦することで多くのことを学べます。高い目標を持って取り組むことこそが、能力を高めることに繋がるものと確信しています。

即戦力を求められる昨今、強みを持ち伸ばすことは重要です。自分のコアが何なのか、しっかり自分を見つめ、自分の頭で考え、自分に磨きをかけてください。

特集「大学院課程」

大学院課程に進んだ理由は人様々です。そこで何を学び、何を経験し、何を目指そうとしているのか。現役の院生に取材しました。

人間・自然環境研究科2年
佐古 貴子 さこ たかこ

知識と視野を広げるために

私が大学院に進学した理由は、二つあります。「進学してもっと勉強したい」ということと、「専門性を高め、なおかつ人間・自然環境研究科という特色ある研究科で幅広い知識を身につけたい」ということでした。また、人生の中で大学で勉強できるチャンスはそう何回もなく、自分自身で物にしていかなくてはいけないという強い思いがあったからです。

大学院に進学してみますと、学部の時とは違い比較的少ない人数で講義を受けることも少なくはなく、一人一人の学生に教官の目が行き届き、細やかな指導を受けることができました。

専門性を高めるという意味では、より深い専門の講義を受けることができたこと、人間・自然環境研究科の特色である幅広い分野の授業を履修できたことも、より自分の視野を広げることができ、専門である書道の研究方法にも大きな影響があったと思います。

そして、多くの留学生の方と一緒に講義を受ける機会が学部の時より一段と増え、活発に意見を交換できたということも良かった点だと思います。

私は大学院に進学したことによって、とても有意義な時間を得られたと思っています。

歯学研究科2年
本那 智昭 ほんな ともあき

道中双六

私は歯学部卒業後、医員（研修医）として歯学部附属病院に2年間勤務しましたが、大学に長く残って仕事がしたいと考え、大学院に進学することを決めました。自分のやりたい事をやるために、まず基礎をしっかりと固める必要性を感じていましたし、長い目で見た場合、ここら辺で一本筋金を入れておいた方が良いという判断でした。

大学院では、学部の教育と比較して、時間の使い方についての自由度が高い反面、実験計画の作成やスケジュール管理など、自己管理能力が必要となってきます。また、学部の教育では、定期的に各教科の理解度を筆記試験や口頭試問等で数値化してもらえるので、自分の能力を客観的に知ることが出来ますが、そういった類の試験が少ない大学院では、自分の能力を自己評価できる視点を持つことも重要ではないかと考えています。

大学院進学当初、社会人から学生へ逆戻りしたこともあり、自分がすごく回り道をしているように感じたのですが、自分の到達目標がはっきりしているのであれば、いつもいつも最短距離を走る必要もないと考え直しました。自分が選んだ選択肢を正解に導けるかどうかは、これからの自分の努力次第だと思います。

栄養生命科学教育部1年
武藤 佳瑞智 むとう かずさ

自分という木を育てながら

この3月に医学部栄養学科を卒業し大学院生となってまだ日が浅い私ですが、学部生時代を振り返り、今やっとスタート地点に立ったばかりのような気がしています。

生きていく道を自分という木を育てることに喩えるなら、学部卒業までに受けた教育はいわば土壌を造る過程ではないでしょうか。土は基礎であり、その良し悪しによって風雪にも耐える堅牢な根を張ることができるか否か決まります。しかし、受験など選択の機会はあっても基本的には許容された範囲内での自由と責任であったこれまでと異なり、どんな種を選ぶか、どのように育てていくかを決め、自らの意思で自分を創る第一歩となるのが卒業時の進路の選択だと思います。そして栄養学という分野での進学を選択した私にとって、大学院での研究は、その種を豊かな枝葉の大きな木に育てていく方法を学ぶ場であり、さらに木は一本だけで独立せず、周囲との関係性において成り立つことから、調和や競争を戦略的に計画していくことを学ぶ場でもあります。これまでは周囲との関係ではどちらかと言えば協調だけを考えていればよかったのですが、研究という分野においては、競争に勝ち抜いて行かなければならないことが学部生までと大きく異なる点だと思います。

ご指導して下さる先生方、適切な助言を与えてくれる先輩方、頼りになる友人達や新しい視点をもたらしてくれる後輩達に支えられながら、科学的好奇心を肥料に、自分という木を育んで行きたいと思います。

医学研究科2年
近久 幸子 ちかひさ さちこ

自分の頭で考える

私は、学部と大学院修士課程までは総合科学部に在籍しており、卒業研究に着手する頃、大学院に進学することを決めました。元々興味のあった内容をテーマにさせてもらえたこともあって、実験やデータについて考えることが楽しくなり、さらに突き進んで研究してみたいという思いからでした。

学部での比較的受動的な教育に対して、大学院ではセミナーにおけるプレゼンなど能動的なものが増えてきます。研究に関しても、言われたことをこなすだけで精一杯だった学部時代とは異なり、大学院では、実験手順からデータ処理、考察に至るまで、自分であれやこれやと考えなければなりません。また、学会発表を経験するにつれ、自分のデータや考察に対する責任を強く感じ、研究者としての自覚を持たなければならないと思うようになってきました。

私自身は、大学院と学部における相異点は、様々な面で「自分の頭で考える」ことにあったと思います。その分、実験が失敗したり思わぬ結果がでたりした時の、悩む回数・落ち込む度合は指数関数的に増えていく毎日ですが、基本的には大学院進学当初の気持ちと変わらず、楽しく研究活動に励んでおります。

薬科学教育部（博士後期課程）1年
田中 直伸 たなか なおのぶ

自分の将来のために

学部時代は、テストや国家試験に合格するために勉強をし、言われるがまま実習に取り組んでいました。大学院に在籍し研究を行っていると、それらがバラバラのものではなく繋がりのあるもので、その二つが重要なものだと感じます。

学部における研究とは大学院での下準備であり、大学院における研究とは学部で身に付けた知識をもとに、個人の個性を発揮して行うものです。

学部での講義や実習では、その内容を理解することに全力を注ぎます。しかし、大学院で研究を行っていると、先生方の指示通りに実験しても、必ずしも同じ結果が得られるとは限りません。大学院で行う研究は未知への挑戦であり、それは先生方にとっても同じことだからです。

ただ、先生方が積み重ねてこられた知識・経験は膨大です。その知識を吸収し、出来れば将来、それを乗り越える気持ちで進学しています。

大学院・学部では社会に出た時と比較すると、自由に考え行動することができ、その時間もあります。自分の将来のために、すでに社会に出ている人に負けないように貪欲に知識を吸収し技術を身につけることが必要だと感じます。

工学研究科3年
辛 道勲 しん どふん

自発的に取り組む姿勢

私は韓国の東儀大学を卒業してすぐある企業に就職をしました。このとき自分自身で何もできないと実感したときの衝撃は強烈なもので、1年間の企業生活ですっかり自信をなくしてしまいました。

失った自信感を取り戻すために、徳島大学の工学研究科に入学しました。大学院に進学してからは学部時の授業とは違って、自らやりたいことを見つけて研究を行うことに新鮮さを感じました。ただ単に本から得る知識だけではなく、実際に目で見て手でさわって、そして、体で感じる研究を行うことが大学院での学習の中心でした。自分自身でいろいろ調べたり勉強していくために、興味あることを早いうちに見つけ、研究に対して自発的に取り組む姿勢を必要とすることが学部とは違って大事になっています。

ドクターコースの3年間はこれらのことを学ぶことで人間的に大いに成長したと感じています。